
アビー

江渡捨文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アビー

【Nコード】
N2457M

【作者名】
江渡捨文

【あらすじ】
男が目覚めるとその体は縛り付けられ、目の前には女が立っていた。彼の運命や如何に。

（前書き）

短編四作目。

読んで頂けたら幸いです。

目を覚ますと、俺の体は木製の椅子にきつく縛り付けられていた。見渡した部屋の中にはダンボールやガラクタがところ狭しと乱雑に積み上げられている。

壊れたテレビやビデオデッキ、使わなくなった自転車、もう二度と読む事はないであろう雑誌の束……。

それら全ての品々と、薄暗くてカビ臭いこの部屋には見覚えがあった。

ここは俺の自宅の地下室だ。

目の前にはアビーが立っていた。

何かをブツブツと呟きながら、手に握り締めた包丁を見つめている。

アビー、先週別れた女だ。どうやら彼女が俺に一服盛ったようだ。コーヒーに口をつけてから、その先の記憶がない。

恐らく昏倒した俺を地下室まで引きずり、椅子に縛り付けたのだろうが、階段を降りる時に俺を氣遣ってはくれなかったようだ。身体中が痛む。

どうしても話したい事があると訪ねてきた時に、彼女を部屋へ入れた事が悔やまれた。

「アビー、一体何のつもりだ」

俺が尋ねるとアビーは目を見開いて俺を見た。

「何のつもりですって？」そう答えた彼女の肩はブルブルと小刻みに震えている。

「言っただよね、確かに言っただわ。ずっと私を愛してるって。別れる時はどっちかが死ぬ時だった」

その抑揚のない声からは何の感情も読み取れず、まるで素人が読んだ台本をテーブルコーダーから流しているようだった。

彼女の目は今にも飛び出さんばかりにカッと見開かれていたが、

それ以外に表情は無く、怒っているようにも、驚いているようにも、あるいは苦痛を堪えている ようにも見えた。

俺にはその顔がまるで、何か気味の悪い人形のように見えた。

テープレコーダーの声で彼女は言った。

「そのとおりにするの。だから、そのとおりにするのよ。ソノトオリに」

この時になって初めて俺は心底恐怖した。俺はようやく気がついたのだ。この女はイカれてる。

間違はなく。この上なく。完璧に。そう、この女はイカれきっている。

俺は唾を飲み込むと、慎重に言葉を選びながら言った。

「アビー、確かに君の言うとおりだ。俺が悪かった。許してくれ。考えなおそうじゃないか」

アビーは宙空を見つめブツブツと呟いている。

その顔からは相変わらず感情が読み取れず、話を聞いているのか聞いていないのかさえわからない。

「なあ、アビー。頼む、俺にチャンスをくれ。君は俺にとって無くてはならない存在なんだ。今それに気づいたよ」

俺は思ってもいない事を口にしたが、縛り付けられ身動きの取れない俺にできる事と言えば、でき得る限り彼女を刺激しないよう、この場を穏便に済ますためのまかせを言う事ぐらいだろう。

どうにかしてこのサイコから逃げ出さなくては、何をされるかわかったものじゃない。

どうしても彼女の手に握られた包丁に目がいく。

意志にかかわらず、再び喉がゴクリと鳴ったが、口の中はカラカラに乾いていた。

なぜこんなことになったのか。俺達が付き合っている間には彼女はこんな素振りは見せなかった。

彼女はごく普通の大学生だった。少なくとも俺にはそう見えた。

二人で映画を見て、おしゃべりして、酒を飲んで……。

だが待て、思い返せば、あの時の顔。俺がテレビを見ながら冗談で「あんな美女と付き合えたらな」と言ったときのアビーの顔。あれは今アビーが見せているこの不気味な人形めいた顔じゃなかったか？

その時は、まずい、怒らせてしまったか？　ぐらいにしか思わなかったが、それは彼女の心の内に潜む病的な何かが顔を覗かせた瞬間だったのかもしれない。

しかし、それだけの事で気づく者などいるだろうか。こんなことになる？

ともあれもう遅い。事は起きてしまったのだ。

「アビー？　腕が痛いよ。縄をほどいてくれ」

俺はできるかぎり哀れみを誘う声でそう言った。彼女は答えた。

「そうね、考え直してくれるならそれでいいわ。ううん。それがいい。私もあなたが好きだもの。切り取るだけで許してあげる」

俺は一瞬困惑した。彼女は今なんと言った？　切り取る？　いったい何を！？

だが困惑はすぐに恐怖へと変わった。実際、切り取られてもいいものなどある訳がない。

「待て、頼む、待ってくれ！」俺は叫んだが、アビーは答える代わりに包丁を手になじり寄ってきた。

刃が天井からぶら下がったランプのか弱い光を受け、ざらりと光った。

俺は必死で彼女から逃れようと抵抗したが、椅子に縛り付けられた男に出来る抵抗など、せいぜいどこかのメタルバンドよろしく首を激しく振り、ガタガタと椅子を揺らす事ぐらいだった。

思い切り上体を揺さぶった拍子に椅子ごと倒れた俺は、硬いコンクリートの床に頭をしこたま叩きつけ、気を失った。

目を覚ますと俺はソファーに寝そべり、アビーは俺の顔をニコニコと見つめていた。

激しい頭痛がする。思考はぼんやりとして定まらず、まるで霧の中にいるようだ。

頭に手をやると何かゼリーのような柔らかいものに触れた。それにしてもアビーが手に抱えている瓶は何だ？

瓶には液体が満たされ、その中に小さな灰色の塊が浮かんでいる。

それはなんだ。アビー。頭が。

笑っている。灰色の。

アビー。

（後書き）

いかがでしたか？

感想、批評等お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2457m/>

アビー

2010年10月8日14時32分発行